

文末表現「わけだ」の意味と用法

横田 淳子

(2000.10.31 受)

1 はじめに

日本語の文末表現としての「わけだ」は日本語教育では中級で提出されるが、適切な使い方を学習者に習得させるのが難しい項目の一つである。それは「わけだ」の意味が一義的に規定しにくいからである。

(1) 波がずいぶん荒いですね。台風が近付いているわけですか。

(2) 波がずいぶん荒いですね。今日は船を出せないわけですか。

(1)は「わけだ」のついた節が前に述べている事柄の理由を述べているように見え、(2)は結論を述べているように見えるが、「わけだ」自体にはどのような意味があり、それがどのように使われるのか。

文末表現としての「わけだ」は、論理の筋道を表す実質名詞としての「わけ」に「だ」がついたものではなく、「わけだ」ひとまとまりで、ある機能をもっていると考えられる。

(3) 昨日ね、彼のうちに初めて行ったわけ。

(3)のような使い方も話し言葉の中でよく見られるが、これも文末表現の「わけだ」の「だ」が省略されたものであると考えられるので、ここでの考察に含めることとする。ただし、「わけだ」の否定形の「わけではない」「わけがない」「わけにはいかない」はこの論文では扱わない。

「わけだ」を使った文は日常よく耳にするために、日本語学習者はその意味や使い方の説明を要求してくる。しかし、日本語母語話者はあまり意識せずに「わけだ」を使っているだけに学習者を納得させるような説明がしにくい。本稿では、できるだけ日本語学習者に納得してもらえるような形で「わけだ」文の基本的な意味・用法を整理し、その上で「わけだ」文の指導法についても考察することとする。

2 「わけだ」文に関わる二つの事柄の捉え方

「わけだ」の基本的な意味は、二つの事柄⁽¹⁾の間に筋道や道理があり、一つの

事柄から筋道や道理に沿って考えていくともう一つの事柄にたどりつく、もう一つの事柄とはそのような論理をたどっていったところから出てきた帰結であるということ述べるものである。言い換えれば、二つの事柄の間に論理展開による一つの関係を認める言い方である。その関係とは一般的に「説明」を表すと言われている⁽²⁾。

先行研究の多くは、二つの事柄の関係を検討することで「わけだ」の表す「説明」の意味を分析し、その用法を捉えようとしている。二つの事柄を寺村、松岡、劉、野田はP、Qと、グループ・ジャマシイはX、Yと命名して、二つの事柄の関係分析から用法の解明を試みている。しかし、ここで注意しなければならないことは、論者によってP、QやX、Yの指すものが違っていることである。

まず、寺村のPとQについて見てみよう。一貫して「Qワケダ」という使い方をしていることから、Qは形の上から「わけだ」につく節を指すと考えられる。一方、Pは「一つ、あるいはいくつかの、既に事実として確認されている事柄」⁽³⁾であり、「明らかな既定の事実」⁽⁴⁾であると言っている。Qは、「そこから推論すれば当然Qになる」⁽⁵⁾という言い方をしていることから、物事の「結果」を指すようにも読める⁽⁶⁾。しかし、寺村のPとQを物事の「原因」と「結果」のように解釈していいのだろうか。

寺村は「ワケデハナイ」の項で次のような例文をあげ、以下のように説明している。

「(36) 井住千代という女は、果たしてどういう性格の女なのか。そういう疑問に出会うことがあっても、人びとは容易に回答をだそうとはしなかった。いや、彼らに意見がないわけではない。その一つは……

(36)の例でいうと、『井住千代の性格について尋ねても、人びとはすぐ答えようとしない』(=P)と聞くと(あるいは読むと)、人はふつうは『それはその人たちに格別の意見がないからだろう』(=Q)というふうに考えるだろう。ところがそうではないのだ、とPからQを導き出す推論を否定するのである。」⁽⁷⁾

この説明でも、Qは「それはその人たちに格別の意見がないからだろう」で、「わけだ」(ここでは否定形の「わけではない」であるが)がついた節である。明らかな既定の事実Pは「井住千代の性格について尋ねても、人びとはすぐ答えようとしない」ことであり、そこからQが導き出されている。しかし、このQは事柄Pの理由であり、結果ではない。推論するものは既定の事実Pの理由であって、結果ではないのである。

以上の考察から次のことが言える。

寺村にあっては、Qは「わけだ」がついた節を指し、既定の事実Pからの推論の行き着くところである。Qは「推論の帰結」であり、それは物事の客観的な結果とは限らないから、Qを物事の「結果」とは言えない。数としては少ないかもしれないが、Pからその原因・理由を推論することもある。そのような場合は、「わけだ」がついた節QはPから推論した帰結として原因・理由を指すことになる。

野田は、「わけだ」は「それ（筆者注「わけだ」のこと）がついた命題（以下、Qとする）と先行する文や状況（Pとする）との関係を示すという機能をもっている」⁽⁹⁾のように、PとQを明確に規定している。つまり、形態から「わけだ」がついた節をQと規定し、先行する文や状況をPと規定しているのである。用例として挙げられているQはPの結果である場合が多いが、「P『歯にひびが入ったことがわからなかった』ことから、その理由としてQ『酔っていた』と仮定して…」⁽⁹⁾のように、Qが理由である場合も挙げている。

松岡は、寺村の説明を「原因・きっかけとなるPを立て、それによって生ずる結果（帰結・結論）をQとし、そのPとQとの関係で『わけだ』をとらえようとするのは極めて妥当なこと」⁽¹⁰⁾だと述べて、Pを原因、Qを結果と解釈している。さらに、この解釈によるPとQを使って、Qばかりでなく、「原因・きっかけ」となるPにも「わけだ」がつく場合が存在すると述べ、「わけだ」がついた節が、「どうして時に理由を表わし、時に結果を表わすのか」⁽¹¹⁾という疑問に答えようと論を進め、「…納得することが基本なのだから、PとQのいずれかが言わなくて済む（くり返す必要がない）となれば、Pが消去されてQだけ残り、『Qわけだ』となるか、あるいはQの方が消去されて『Pわけだ』となる」⁽¹²⁾と結論を述べている。

このPとQの規定のしかたは明らかに寺村や野田とは異なる。すなわち、形態から「わけだ」がついた節をQと規定するのではなく、内容から事柄の原因・きっかけとなるものをP、その結果をQと規定しているのである。

劉は「前提・条件、常識・既知情報にあたるコトをP、結論・説明にあたる部分をQとする」⁽¹³⁾として、やはり事柄の内容からPとQを規定している。QだけでなくPにも「わけだ」がつく場合を認めている点で松岡の解釈を受け継いでいる。

グループ・ジャマシイは、XとYを使って二つの事柄の関係を分析しているが、

形態の上から「わけだ」がついた節をYと規定している。「わけだ」の用法としては、ともに使われる接続表現等の違いによって、YがXの「結論」や「言い換え」や「理由」などを表すと言っている。ただし、「わけだから」に関しては、「XわけだからYは当然だ」「XわけだからYでも当然だ」のように、Xは「わけだ」に先行する節になっている⁽¹⁴⁾。

3 寺村の分類

各論者によるPとQ、またはXとYの違いを押しえた上で、後の研究の基礎になっている寺村の分類をとりあげ、検討することとする。寺村は「わけだ」の用法を次のようにまとめている。

〔(i) あるQという事実に対し、なぜそうなのかを説明するために、明らかな既定の事実Pをあげ、そこから推論すれば当然Qになる、ということを用い言いかた。『……コトニナル』と言いかえができる。

(ii) Pという聞き手に身近な事実をあげ、その事実は、ある角度、観点から見るとQという意味、意義がある、ということを用い聞き手に気づかせようとする言いかた。『言いかえると…』というぐらいの軽い感じの場合もある。

(iii) $P \rightarrow Q$ という推論の過程は示さず、Qということを用い、自分がただ主観的にそう言っているのではなく、ある確かな根拠があつての立言なのだということを用い言外に言おうとする言いかた。乱用すると独善的な、押しつけ的な印象を与える。⁽¹⁵⁾

用法(i)では「ことになる」と言い換えが可能であると言っているが、次のような、松岡が挙げている例文の「Qわけだ」は「ことになる」と言い換えられない。

(4) A「大学の中が静かですね」

B「冬休みに入ったのです」

A「ああ、それで静かなわけですね」(松岡1)

寺村の用法(i)の説明を使って(4)を分析してみると、「大学の中が静かだ」という事実Qに対し、なぜそうなのかを説明するために、明らかな既定の事実であるP「冬休みに入った」をあげ、そこから推論すれば当然Qになるということを用い言っているとなり、説明としては納得がいく。しかし、「ああ、それで静かなわけですね」を「ああ、それで静かなことになりますね」とは言い換えられない。

寺村は他の個所では、「Qわけだ」を次のように説明している。

「一般的な形でいうと、Qワケダは、一つ、あるいはいくつかの、既に事実として確認されている事柄（P1, P2, P3, ……）からの当然の帰結としてある事柄（Q）がある、ということをおうとする用法である。

(41)の例でいえば、

- 信吾は東向きに坐る…………… P1
- その左に保子は南向きに坐る…………… P2
- 信吾の右に修一が北向きに坐る…………… P3
- 菊子は西向きだ…………… P4
- （当然の論理的帰結 →）菊子は信吾と向い合っている
- 『菊子は……………信吾と向い合っているわけだ。』（16）

この用法は、事柄Pからの当然の帰結としてQがあるという用法なので、ここで仮に「帰結用法」と名づける。事柄Pからの当然の帰結として出てくるQ「菊子は……………信吾と向い合っているわけだ」は「向い合っていることになる」と言い換えることができる。

ある事実Pから推論して当然Qになるという同じような流れにも関わらず、「ことになる」と言い換えが可能な場合とそうでない場合があるのはどうしてなのか。この違いは、話者の認識の順序が関係しているのではないだろうか。

寺村の挙げている(41)の例ではP1、P2、P3と次々と事実が認識され、その結果、「菊子が信吾と向い合っている」ことが当然の帰結として出てくる。話者の認識としてはP1、P2、…と事実を押しえていってその流れの末にQが認識されるのである。この場合は「ことになる」と言い換えが可能である。つまり、「帰結用法」では「ことになる」と言い換えられる。それに対して、(4)では、話者は事実Qをまず認識し、次にその理由を自己の内省または他からの情報で悟り、それで事実Qの事情に、またはPとQの関係に納得したということをおう「わけだ」で表しているのである。つまり、話者の認識としては最初にQがある。次にPに認識が移り、もう一度Qに戻る。この用法をここで仮に「納得用法」と名づけると、寺村の用法(i)はこの「納得用法」を説明しているように思われるが、「納得用法」の場合は「ことになる」と言い換えることはできないのである。

次の松岡の例文は寺村の用法(i)からどのように分析できるであろうか。

- (5) B「大学の中が静かでしょう。どうしてだかわかりますか。」
- A「さて。あ、わかりました。つまり、冬休みに入ったわけですね。」
- (松岡1)

寺村では「冬休みに入った」は「わけだ」がついた節であるからQである。「大学の中が静かだ」はPとなる。「冬休みに入った」という事実Qに対し、なぜそうなのかを説明するために、明らかな既定の事実であるP「大学の中が静かだ」をあげ、そこから推論すれば当然Q「冬休みに入った」になるということを言っているとなってしまう、説明としては変である。

それでは前述の寺村のもう一つの説明「帰結用法」を使って分析してみると、どうなるだろうか。これだと、P「大学の中が静かだ」という既に事実として確認されている事柄からの当然の帰結としてQ「冬休みに入った」という事柄があるということになる。「大学の中が静かだ」という事柄からの当然の帰結として「冬休みに入った」という事柄があるとするのは説明としてやはり変である。

しかし、寺村の「帰結用法」の説明中の「当然の帰結」の前に「その理由を推論した」を挿入し、「既に事実として確認されている事柄Pから、その理由を推論した当然の帰結としてQがある」としたらどうであろうか。人はある事実を確認したとき、必ずその結果を推論するとは限らない。その理由を推論する場合もある。つまり、認識の上では、ある事実からその理由や原因を推論することもあれば、結果を推論することもあり、そのためにQは原因・理由を表すこともあれば、結果を表すこともあるのである。

寺村の用法(i)についての以上の考察は、次のようにまとめられる。

用法(i)はさらに細かく分ける必要がある。一つは、PからQに論を展開させQを帰結とする「帰結用法」である。事柄の結果を表すことが多く、この場合は「ことになる」と言い換えができる。「帰結用法」では理由を表すことも可能であるが、この場合は「ことになる」と言い換えられない。もう一つは、ある事柄を説明するために考えをめぐらせた末に、その事柄の成立に改めて納得する「納得用法」である。はじめにQという事実を認識し、なぜそうなのかを説明するPを認識し、PとQ二つの事柄の関係に納得する態度を「Qわけだ」で表すものである。この場合も「ことになる」と言い換えることはできない。

用法(ii)(iii)については、ここで特に付け加えることはない。

4 「わけだ」文における認識の流れ

事柄の客観的な流れを見ると、ある事柄が存在するのには、まず、それが出てくる原因・理由となる事柄が存在する。そして次に当該のある事柄が存在し、最後にその事柄の結果が存在する。しかし、人は当該の事柄を認知した時、次に、

その事柄が出てくる理由・原因に思いが至ることもあれば、その事柄の結果に思いが至ることもある。つまり、認識においては、因果関係の時間的、論理的流れの前の方に遡ることもあれば、後ろの方に思いが行くこともあるのである。

「わけだ」は二つの事柄の間に論理的な筋道が認められると話者が主張する場合に使われるのであるから、事柄の客観的な流れよりも話者の心の動きが言語形式に反映する。したがって、話者が事柄をどのような順番で認識し、それらの事柄の間にどのような関係を認めているかが重要な要素になる。「わけだ」文の意味・用法の分類にあたっては、話者の事柄認識の順序と事柄間の関係を考慮する必要がある。

事柄の客観的な流れと認識の流れを図示すると次のようになる。

Yという一つの事柄に関係するものとしてはその原因・理由である事柄Xと、その結果である事柄Zがある。X、Y、Zという三つの事柄の客観的な流れは以下のようなになる。



図1 事柄の客観的な流れ

しかし、それを表現する話者の認識は必ずしもいつもこのような流れをとるとは限らない。まず、ある事柄Yを認識する。話者はそこからその原因や理由に論理を展開させ、Xに行き着くこともある。また、話者はYを別の角度から見てY'と認識することもある。さらに、ある事柄Yを認識して、それがなぜそうなのか説明をさがし、Xを見つけてXとYの関係に納得し、改めてYを認識することもある。

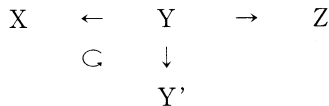


図2 話者の認識の流れ

「わけだ」は、話者がYという事柄を認識し、そこから論理を展開させてある事柄に行き当たり、その二つの事柄の間にある関係が存在することを言いたいという話者の態度を表すものである。形態としては、認識の矢印の先であるX、Y'、Z、Y（Yから出発してXへ行き、Yに戻る）に「わけだ」はつくことになる。

5 「わけだ」文の分類

4で述べたように、「わけだ」文を話者の事柄認識の流れに注目して分類し、先行研究にある例文を当てはめて検討してみる。

事柄の客観的な流れの順序に従って、第一の事柄をX、第二の事柄をY、第三の事柄をZとし、そのうちの二つの事柄を話者がどのような順序で認識するかを矢印でもって示す。Yはいずれの場合も話者がはじめに認知する事柄である。①～④の場合はYから延びた矢印の先に位置する事柄に「わけだ」がつく。⑤は①～④の派生的な用法である。

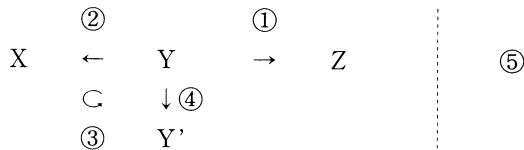


図3 事柄認識と「わけだ」

① 帰結用法1結果 Y→Z (図3の①)

「Y。(だから) Zわけだ。」の形態を取る。「わけだ」のついた節が論理的な筋道の帰結として出てきたことを主張する「帰結用法」のうち、「わけだ」のついた節が事柄の結果Zである表現である。「ことになる」と言い換えることが可能である。冒頭の例文(2)はこの例である。

(2) 波がずいぶん荒いですね。今日は船が出せないわけですか。

話者はY「波が荒いこと」を認知する。その上で、その事柄の結果Zの方向に推論を展開させ、Z「今日は船が出せない」を導き出したので、これに「わけだ」をつけている。

客観的な流れに沿った論理展開であるため、順接接続を表す接続表現（「だから」、「したがって」、「ば」、「なら」、「から」、「じゃ」など）と一緒に使われることが多い。論理の展開として一番自然であり、したがって、「わけだ」の用法の中で一番多く、客観的な内容の論文などでも使われる。

(6) 体重をはかったら52キロになっていた。先週は49キロだったから、一週間で3キロも太ってしまったわけだ。(辞書)

(7) 明日から2泊3日で熱海の温泉に行くの。——へえ、いいわね。じゃ、その間仕事のストレスからは解放されるわけね。(辞書)

(8) この料金でサービスを提供できるのは売手Aだけですが、買手の方はC

もDもサービスを利用したいと考えます。したがって需要が供給を上まわるわけです。(藤村)

(9) (10)のようにZが未知の場合は「はずだ」とも言い換えられる。

(9) 時差が四時間あるから、日本時間のちょうど正午につくわけだ。(森松)

(10) なにしろコレラの潜伏期間は短いのである。その二人がいつ、どこで羊かんを食べるか分からないが、今日中だとすれば、明日か明後日までには、コレラ特有の下痢が始まるわけだ。(劉)

② 帰結用法 2 原因・理由 Y→X (図3の②)

「Y。Xわけだ」の形を取り、事柄Yの原因・理由を判断したり確認したりする。「わけだ」のついた節が論理的な筋道の帰結として出てきたことを主張する「帰結用法」のうち、「わけだ」のついた節が事柄の原因・理由Xである表現である。

(1) 波がずいぶん荒いですね。台風が近付いているわけですか。

話者は、①の場合と同様にY「波が荒いこと」を認知する。次に、その理由Xの方向に推論を展開させ、「台風が近付いている」に行き着き、そのことを主張するために「わけだ」をつける。

この「Xわけだ」は「Xからだ」と意味に近いが、「からだ」が単純に理由を述べているのに対して、「わけだ」の場合は話者が既知の事柄Yから導き出した(判断した)「理由」であることを主張している。

(11) 熱もあるし、のども痛い。かぜをひいたわけだ。

客観的な状況としては、風邪をひくという事柄Xがあり、その結果、熱があり、のどが痛いという状態Yになる。つまり、風邪をひくが原因で、熱やのどの痛みはその結果である。その証拠に「風邪をひいたから熱もあるし、のども痛い」とは言えるが、「熱もあるし、のども痛いから、風邪をひいた」とは言えない。しかし、話者の認識の上では、「熱やのどの痛み」という状態Yをまず感じ、そこからX「風邪をひいた」と判断を下すのである。話者の頭の中ではX→Yという流れではなく、Y→Xという流れで推論がなされているのである。

(12) 学校の中が静かですね。あ、冬休みに入ったわけですね。(松岡1)

(13) 今年の米のできが良くなかった。冷夏だったわけだ。(辞書)

③ 納得用法 Y→X→Y (図3の③)

「X。(だから) Yわけだ」という形で、原因と結果の結びつきに納得している態度を表す。認識としては、最初にYを認知し、その理由Xを推論し、そこか

らXとYの関係に納得し、「Yわけだ」と言う。「Yわけだ」の前に「どうりで」など納得する態度を明確に示す言葉が来ることも多い。

Yから順番に論理を展開させてZに至るという過程を経ていることに力点を置く①の「わけだ」に対して、③の「わけだ」では二つの事柄の間に原因・理由と結果という関係を認め、その関係に納得しているという態度表明に力点が置かれている。①は「ことになる」と言い換えられるが、③は「ことになる」と言い換えられない。

(14) 最近円高が進んで、輸入品の値段が下がっている。だから洋書も安くなっているわけだ。(辞書)

「洋書が安くなっている」という事柄Yがまず話者の認識としてある。それはなぜかと疑問を持っているとき、X「最近円高が進んで、輸入品の値段が下がっている」の情報を得て、Yの事柄に納得する。

(15) 山本さん、結婚したらいいですよ。——ああ、そうだったんですか。それで最近いつもきげんがいいわけだな。(辞書)

(16) 目が充血したり、目やにが出たりします。ほこりが目に入っただけでも痛く、涙の出た経験はだれでもあるでしょう。まして、まつげがいつも目をこすっている状態ですから、痛がるわけです。(松岡2)

Yには(17)(18)(19)のように否定形がよく来る。また、納得した気持ちが強く出て、(18)(19)のように「Yわけだ。Xだから」のように倒置されることも多い。

(17) 彼、アメリカに行ったんだって。どうりで、最近見ないわけだ。

(18) あかないわけです。かぎが違っているのですから。(森松)

(19) いくら待っても来ないわけだ。このホームには線路が無いのだもん。(森田)

④ 捉え直し用法 Y→Y' (図3の④)

ある事柄を違う角度、観点から捉え直し、違う意味、意義があること主張し、それを聞き手に注意させるために「わけだ」を用いる。松岡では表裏の関係と言っているもので、「ことになる」と言い換えられる⁽¹⁷⁾。

(20) 波がずいぶん荒いですね。海水浴シーズンも終わりというわけですか。話者はY「波が荒いこと」を認識する。これを別の視点から、Y'「海水浴シーズンも終わりだ」と捉え直し、それを主張するために「わけだ」をつけている。

(21) 破格の低料金でニューヨークーロンドン間を飛ぶレイカー航空の“空飛ぶ通勤列車” スカイ・トレーンが一番機が二十六日夜、ニューヨークのケ

ネディ国際空港を飛び立った。片道運賃は約二万八千円で、他社の六割五分引き。米国と欧州との間がまた近付いたわけだが、これは米英航空業界のダンピング合戦の始まりでもある。(寺村)

- (22) 一人前の大人になって、いまさら昆虫採集などという役にも立たないことに熱中できるのは、それ自体がすでに精神の欠陥を示す証拠だというわけだ。(森松)

「言い換えると、要するに、つまり」などと同じ働きがあり、これらの言葉と一緒に使われる。

- (23) 彼女の父親は私の母の弟だ。つまり彼女と私はいとこ同士なわけだ。
(辞書)

それまで述べたもろもろの説明を別の言葉でまとめる言い方として、段落の最後で用いたり、相手の話を自分の言葉で捉え直したりする時にも使う。

- (24) 十八の春、戯曲を書きはじめた。葬式をしたかったのだ。私にとって芝居は葬式なのだ……私は九本の芝居を書いた。死ねなかった自分を芝居の中で九度殺し、九度吊ったわけだ。(松岡 2)

- (25) 「待ってくださいよ」と、梅木は手帳を出した。

「つまり、三月からご主人はマージャン徹夜が始まったわけですね？」

「そうなんです」(劉)

⑤ 派生用法 (図 3 の⑤)

最後の用法は以上の 4 つの分類からの派生的な用法で、話者がある事柄を述べるのに、その裏に口に出さないさまざまなことがあるということを聞き手に示そうとする用法である。いろいろと紆余曲折があったけれどもある結論に至ったときなどに、裏の事情を言外にほのめかす意味で使う。この場合は、前提となる事柄は具体的には明示されない漠然としたものであることが多い。

- (26) こうして二人は結婚して、幸せに暮らしたわけです。(森松)

話者にとっては常識や既成の事実であると考えるものに「わけだ」をつけて言う。話し言葉でよく使われ、話者自身無意識に使っていることも多い。

- (27) 台風が近付いているわけだから、つりは無理だろう。

- (28) わたしは国史を専門にしているわけですが、わたしのような文献を扱う者の立場からすれば、もっと史料を大切にすべきではないかと思うんです。

(森松)

- (29) 4 人とも車で来るわけだから、うちの前にずらっと 4 台路上駐車するこ

とになるね。(辞書)

前提となる事柄を聞き手も当然知っていることだと話者が勝手に解釈して使うと、押し付けがましい印象を与えるので、使い方には注意が必要である。

これらの派生的な用法がさらに進み、特別な意味を持たず、ただ話者の口調になって終助詞のように使われている場合もある。

- (30) 例えば、ぼくらが論文書く時に、非常に理論的なアイデアとか構造の変化をどういうふうにとらえるか、という方法論みたいなものを書くわけね。だけど、その背景には、その理論に到達するまでいろいろ計算しているわけだけど、自分でやらなくても、コンピューターを使えば計算はできるわけだ。…(寺村)

特別な意味を持たない「わけだ」を多用すると耳障りな感じを与える場合もある。

6 「わけだ」文の指導に関する一つの試み

「わけだ」そのものには原因・理由、結果、言い換えなどの意味はない⁽¹⁸⁾。

「わけだ」の基本的な機能は、二つの事柄の間にはその二つを結び付けるに十分な筋道があるということを主張する話者の態度を表すことでしかない。二つの事柄の関係を問題とすることから、二つの事柄をPとQ、XとY、YとZなどと命名して分析してきたが、実は文章の中で具体的に何がPやQで、何がXやYやZにあたるのかその認定が難しい⁽¹⁹⁾。母語話者にとっても人によって認定に違いが出て来るような二つの事柄を取り出し、その関係に基づいて「わけだ」の意味を学習者に理解させることは不可能に近い。

劉は接続表現や段落上の位置、共起される語句など形態に着目して「わけだ」文を分類している。この点では学習者の手助けとなりうるが、「Pわけだ」も「Qわけだ」も認め、PとQそのものの認定が難しい上に、PとQの関係を細かく8つに分類しているので実用性に乏しい。また、「わけだ」の「意味・用法」の分類で「当然の帰結・結果」の下位項目として「PとQの関係の提示」を挙げているが⁽²⁰⁾、PとQの関係の提示はどの「わけだ」文にも共通する基本的な意味であり、これを下位分類の1項目とすることには無理がある。

次に、「わけだ」文を日本語学習者に導入する際の一つの試みを提示する。

通常、「わけだ」文は中級段階で導入される。この段階では「わけだ」文を理解させることに主眼を置き、表現させることにまで指導の目標を広げないことが

得策である。したがって、「わけだ」を使って短文を作らせたり、作文を書かせたりはしない。指導にあたっては、はじめに「わけだ」を除いた形で文章全体の意味を理解させる。該当文章に接続表現がある場合は接続表現から、接続表現が用いられていない場合は文章全体の内容から事柄の関係を把握させる。その後で、「わけだ」が加えられることによって、話者が二つの事柄の関係をどのように捉え、どのような態度を表明しようとしているのかを考えさせる。

そのためには、「わけだ」には話者の態度を表す3つの用法があること、第1の用法は、話者が自分の話は論理の筋道を経た帰結であることを主張したり（筆者の分類では①と②）、その帰結に納得する態度を表すもの（筆者の分類では③）であること、第2の用法はある事柄を別の角度・観点から見たり、解釈したり、まとめたりしている態度を表すもの（筆者の分類では④）であること、第3の用法は主に話し言葉で使われるもので、あまり深い意味を持たず、口調のように軽い意味で使われることが多いが、話者の意識下ではそれなりの必然性のある事柄だと主張したい気持ちが働いている態度を表すもの（筆者の分類では⑤）であることを説明する。

次に「わけだ」の3つの用法の具体例を〔図3 事柄認識と「わけだ」〕とともに提示し、「わけだ」をつけることによって、話者がどんな態度を示そうとしているのかを検討させる。学習者は既に文章の意味を理解し、論理の流れは押さえているのであるから、話者の態度を汲み取りやすいはずである。用法の分類は話者の態度を斟酌する時の手掛かりとして使い、一つ一つの例文がどの分類に当てはまるかを厳格に検討する必要はない。それぞれの用法は連続しているものだからである。

「わけだ」を使う話者の態度は基本的には自分の発話は論理的帰結であると主張するものであるから、「わけだ」を使った説明は、単なる説明よりも話者の論理展開の構造に聞き手を引き込む作用がある。聞き手には、話者が自分の論理を半ば強引に納得させようとしているように聞こえる場合もある。また、「わけだ」文を使って相手の話を言い換えたり、自分の理解を確認したりする場合も不遜な感じを与えかねないので、学習者が使うときには十分な注意が必要である。

7 おわりに

「わけだ」文の指導のためには「ことになる」「はずだ」「のだ」などの類義表現との比較検討も必要である。学習者が「わけだ」を表現として使う場合には上

記のように注意すべきことが多いが、「わけだ」文の指導に関してまだ十分な検討が行われていない。よりわかりやすい説明とともに、どこまで教えるかも課題である。作文等で「わけだ」を使用するように学習者に積極的に指導するかどうか意見の分かれるところではないだろうか。

注

- (1) 問題を単純化するため、二つの事柄としているが、正確には先行する文が表す事柄（一つとは限らない）と「わけだ」のついた節が表す事柄である。
- (2) 寺村（1986）は「説明のムード」の章で「ワケダ」を取り上げ、益岡（1991）は「説明の構造」で「ノダ」とともに「ワケダ」を扱っている。ただし、松岡（1987）は概念があいまいであるとして「説明」という言い方を排している。
- (3) 寺村（1986）277ページ。
- (4) 同上 285ページ。
- (5) 同上 285ページ。
- (6) 寺村は「論理的帰結」（1986、283ページ）や「推論の結果」（1992、56ページ）とは言っても「物事の結果」とは言っていない。
- (7) 寺村（1992）57ページ。
- (8) 野田（1992）50ページ。
- (9) 同上 56ページ。
- (10) 松岡（1987）5ページ。
- (11) 同上 6ページ。
- (12) 同上 7ページ。
- (13) 劉（1996）50ページ。
- (14) グループ・ジャマシイ（1998）638-643ページ。
- (15) 寺村（1986）285ページ。
- (16) 同上 277ページ。
- (17) 柏崎（2000）は、「ことになる」のこのような用法を「事態の捉え直し」と呼び、「その事態を捉えるに当たって、前提や条件を異なった視点から見ると、そこから出されてくる帰結が異なったものになるという表現」（57ページ）であると述べているが、「わけだ」についても同じことが言える。
- (18) この点で「『わけだ』」において最も基本的なことは、PとQとの間に上の

ような関係（因果関係、同じ物事の表裏の関係、対立の関係など）があることを話し手が認め、それを納得することである。」（松岡1987、7ページ）という松岡の指摘は正しい。

- (19) 先行研究の「わけだ」文の例文の中には、筆者が「二つの事柄」の認定に同意できないものがいくつかあった。松岡（1993）もPやQの判断には「ものによっては言外の要素を考慮に入れて解釈することが必要となり、そこには、読み手による判断のずれが生ずることも避けがた」（62ページ）く、さらに「PとQの関係といってもその両方が必ず言語化されるものではない」（62ページ）し、「PとQは重文・複文内のレベルから、文と文、さらには、より大きな文のかたまり同士の対応といったようにさまざまな形態をとる」（65ページ）と述べている。
- (20) 劉（1998）51-52ページ。

参考文献

- 柏崎雅世（2000）『『ことになる』『ことにする』の意味と用法 その一『ことになる』『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』26号
- グループ・ジャマシイ（1998）『日本語文型辞典』くろしお出版
- 寺村秀夫（1986）『日本語のシンタクスと意味II』くろしお出版
- （1992）『寺村秀夫論文集I』くろしお出版
- 野田春美（1992）「単純命題否定と推論命題否定—「のではない」と「わけではない」—」『梅花短大 国語国文』5 梅花短期大学
- 藤村知子（2000）「説明文における「ワケダ」の使用例とその機能」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』26号
- 益岡隆志（1991）『モダリティの文法』くろしお出版
- 松岡 弘（1987）『『のだ』の文・『わけだ』の文に関する一考察』『言語文化』24、一橋大学語学研究室
- （1993）「再説—『のだ』の文・『わけだ』の文』『言語文化』30、一橋大学語学研究室
- 森田良行（1996）『意味分析の方法』ひつじ書房
- 森田・松木（1989）『日本語表現文型』アルク
- 劉 向東（1996）『『わけだ』文に関する一考察』『日本語教育』88号

用例出典

- (辞典) グループ・ジャマシイ (1998)
(寺村) 寺村秀夫 (1986)
(藤村) 藤村知子 (2000)
(松岡 1) 松岡 弘 (1987)
(松岡 2) 松岡 弘 (1993)
(森田) 森田良行 (1996)
(森松) 森田・松木 (1989)
(劉) 劉 向東 (1996)

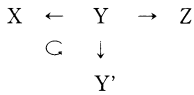
The Meaning and Usage of “*wakeda*”

YOKOTA Atsuko

The basic usage of “*wakeda*” is to express the speaker’s attitude of recognizing that there is a logical relationship between two events. It seems, however, that a phrase with “*wakeda*” sometimes indicates a result and sometimes a cause depending upon the context.

Furthermore, it could be a paraphrase of another event. Therefore, learners of Japanese find the usage of “*wakeda*” quite complex.

In this paper, the meaning and usage of “*wakeda*” are analyzed, based on the speaker’s recognition of events. An event “Y” has happened as a result of a cause “X,” and also it has caused an event “Z.” The order of happening of the events is $X \rightarrow Y \rightarrow Z$. After recognizing an event “Y”, however, a person sometimes thinks its cause “X,” sometimes thinks its result “Z” and sometimes grasps the event from another point of view. The recognition of events has several flows pointed by the arrows, and “*wakeda*” is put to the phrases expressing these events where the arrow goes.



“The usage of “*wakeda*” can be divided into 5 categories. The first category is $Y \rightarrow Z$. The speaker expresses an attitude of recognizing a result of an event. The second is $Y \rightarrow X$. The speaker expresses an attitude of recognizing a cause of an event. The third is $Y \rightarrow X \rightarrow Y$. The speaker expresses an attitude of understanding the relationship between a cause and its result. The fourth is $Y \rightarrow Y'$. The speaker presents another interpretation of an event. The fifth is a derivative usage.

When “*wakeda*” is taught in classes for the first time, it is advisable for a teacher to make the learners just understand the speaker’s attitude and not to make them use “*wakeda*” by themselves since the usage of “*wakeda*” has such complex and subtle meanings.